

20th Anniversary

20

th

第20回 によみのよぶね

2025年12月22日(月) 冬至

★開催時間：16時00分～20時00分頃

★開催場所：鵜飼観覧船乗り場前～長良川右岸プロムナードを中心とした河畔一帯

★ようこそ「によみのよぶね2025」へ★

「によみのよぶね」は、アーティスト日比野克彦さんの発案ではじまった行事で、今年で20年目を迎えます。振り返れば、この20年のあいだに社会も暮らしも大きく揺れ動きましたが、人々は変わらず灯りをつくり、川へ送り出してきました。一年も象徴する「1」から「12」までの月船、そして干支船の姿が並び川面を行き交うその光は、「あなたの過ごした12ヶ月はどんな毎日でしたか？」と、そっと問いかけてきます。これらの大きな行灯は、地域の子どもたち、学校、団体、そして多くの市民の手によってつくられました。素材を整える人、絵を描く人、組み上げる人……。その一つひとつの半仕事が行灯となり、冬の川に浮かんでいます。本紙では、この行灯に込められた人々の思いとつながりをみなさんにお届けしたくて発行しました。行灯の一つひとつに宿る願いを、読者のみなさんにも感じていただければ幸いです。(編集長 加納)

N
W + E
S

岐阜

明後日新聞社

asatteshinbun.gifu@gmail.com

発行元：
明後日新聞社
岐阜支局

社主：日比野克彦

協力：岐阜県美術館

岐阜

いぶき
(岐阜市)



行灯制作が進行中・・・社会福祉法人いぶき福祉会では「1」の月行灯制作に取り組んでいます。10月25日、岐阜市日光町にある「日光町の家」で行われた制作現場を取材しました。「日光町の家」では、普段から利用者の大々が創作活動を行っており、隣接するSHOP「ほそり」はその作品や食品の販売がされています。この日は知室で竹組み作業が進められ、土間と前庭では知紙の色付けが並行して行われていました。前庭の芝生では親子連れがくつろぐ姿も見られ、地域に溶け込んだ温かな雰囲気が感じられました。制作には小学生から高校生までの子ども4人と大人5人が竹組みに参加し、利用者3人と職員の大々が知紙の色付けを担当していました。取材の終わりには、行灯の骨組みがほぼ完成していました。職員の辻本さんによると、今回制作している「1」はによみのよぶね実行委員会事務局の勧めで担当することになったそうです。過去にも「1」を2回、「3」を2回担当しており、今年で5回目の参加とのこと。今回のデザインは公募によって決定され、小学4年生のゆりちゃんが考案した「鵜が鮎を飲み込む」図案が採用されました。図案の鵜の体の部分には可愛らしい花も描かれています。9月21日に開かれた、によみのよぶねの会議の中で、「鵜らしさ、鮎らしさが出るといい」という日比野館長からのアドバイスを受け、職員の大々が「鵜らしさ、鮎らしさ」を出すために試行錯誤をされていました。また、行灯の基本色は水色で、花の部分を描くのか、切り絵にして貼って表現するのも検討されました。長良川の自然と調和するデザインを目指し、地域と福祉、そして創造性が交差するこの取り組みは、冬至の夜に温かな光を灯してくれることでしょう。(鳥野、堀部)

20周年記念
「20」行灯制作
(岐阜市)

543の43-1

「によみのよぶね」は今年で20回目を迎えます！その記念すべき年にみんなが20周年記念の行灯を作りましょう！と、12月7日(日)から柳ヶ瀬商店街の宝玉会館で「20」の行灯制作がスタートしました。行灯のデザインは、「第1回によみのよぶね2006」の月行灯のフォルムを再現した「2」と「0」の行灯で、大きさは各々のサイズ・高さ3m×幅2m(月行灯よりひと回り小さいサイズ)です。この日の参加者は、昨年の国民文化祭・ちーオシの地域リーダーさん、によみのよぶねに携わったことのある方、サンデービルダングマーケットに来られていた方、柳ヶ瀬商店街の方など10名の方が参加しました。まずは数字行灯に必要な直径40cmの輪っかを30個作り、午後からは輪っかして細長い竹を使って「2」と「0」の形に組み立てていきました。15時ごろ「0」の竹組みが完成。「2」の竹組みも半分くらいまで出来ました。知紙は岐阜幼稚園で色塗りされたオレンジ色の知紙で、月行灯制作で残った知紙を使用し、完成した「20」の行灯は、長良川右岸プロムナード河川敷に展示される予定です。また、20周年を記念した「によみのよぶねオリジナルグッズ」の販売や、飲食店の出店のほか、お楽しみいただける演出も予定されているとのことでした。(高橋)



長良川もてなし隊
(岐阜市)



長良川もてなし隊は、「ぎふ清流国体・ぎふ清流大会」が開催された翌年の2013年から「によみのよぶね」に参加。今年で参加回数13回目のチームです。12月6日(土)、長良中学校体育館エントランスで制作中のところ、チーム代表の杉山利史さんにお話をうかがいました。「今年は初めて「3」を担当しています。今年の制作スタートは11月30日からです。」とのこと。制作2日目とのことでしたが、13回参加しているチームというもあり、どんどん竹組みが進んでいき、1時間ほどで行灯全体の形が見えてきました。デザイン担当の谷川さんにもお話をうかがいました。「これまで様々なものをモチーフにし「2」のデザインをしてきました。例えば、アマビエ、鵜飼、アヒル、うさぎ、などです。今回、初めて「3」を制作することになり、新たな気持ちでデザインをすることができました。今年は、岐阜幼稚園の年長さんたちが色塗りをされたカラフルな知紙を貼っていく予定です！」とのこと。園児たちが色塗りをした、黄、青、赤、緑の知紙はとても透明できれいな色でした。行灯の形は円が繋がり、優しい可愛らしい形です。大人と子ども、それぞれの力が組み合わさって出来上がる行灯、楽しみです！(松本、高橋)

アクティヴ4(岐阜市)



光る行灯に彩り添えて「ぬりぬりよぶね」と「はりはりよぶね」開催
【取材日：2025年8月23日/10月11日】
冬至の風物詩「によみのよぶね」に向けた準備イベント「ぬりぬりよぶね」が、岐阜駅隣接の商業施設「アクティヴ4」で開催されました。25周年を迎える同施設では、地域の子どもたちを対象に、行灯に使用する知紙を自由に彩るワークショップが行われました。イベントは午前から午後にかけて3回実施され、記者は最終回に参加。会場には未就学児から小学校高学年までの子どもたちが集まり、筆を手に真剣な表情で知紙に色を重ねていました。どのテーブルでも、家族と一緒に参加した子どもたちが黄、青、赤、緑から好きな色を選び、夢中で作品づくりに取り組む姿が見られました。参加した小学5年生の男の子は「書道を5年以上習っているけど、これは全然違う。うまく書けた時とはまた違った楽しさがある」と語り、ペイントの魅力を伝えてくれました。イベントを知ったきっかけは家族からの紹介で、「楽しそうだったから来ました」と笑顔を見せていました。会場では、参加者の保護者が「明後日新聞」を手に冬至の「によみのよぶね」について語り合う場面もあり、地域行事への関心の高さがうかがえました。また10月に実施したクラフトフェアでの色とりどりの知紙を思い思いの場所に貼る「はりはりよぶね」も大勢の方が参加し、イベントも大盛況でした。(松本)



長良東小学校
チームひまわり
(岐阜市)



デザイン：篠田さん

昨年引き続き、今年も長良東小学校5年の児童が、「総合の学習」の一環として「によみのよぶね」制作に参加しています。12月1日(月)午前、3組の後業を訪れ、お話をうかがいました。「制作してどうでしたか？」と児童の何人かにお尋ねしたところ、「竹を曲げて針金で止めるのが大変だったけど楽しかった」、「色塗りが楽しかった。でも、はじめ色が濃くなってしまって水を足して薄めたり、色を作るのが難しかった。知紙も破れそうで丁寧に塗りました。」とこたえてくださいました。「行灯のデザインは誰がしたのですか？」とお尋ねしたところ「2組の篠田君です」とのこと。制作場所のホワイトボードに貼られたデザイン画を見ていると、別の子が、「篠田君は絵も上手いし、文章を書くのも上手いです。何でも作ることが得意な人ですよ！」と教えてくれました。伸び伸びとした線で描かれた絵の下には、「デザインに込めた熱い思いや願い」と題した説明文があり、熱い思いが伝わってきました。3組担当の知田先生にもお話を聞きました。「数字の「4」と丸行灯制作の竹組みは5年生の1組から4組のみんなが作り上げました。明日からはクラスごとに知紙貼りも始まります。みんなが頑張って完成していきます！」とのこと。みなさんで作り上げた「4」の完成が楽しみです！(高橋)

波雲彫刻
(岐阜市)



波雲彫刻さんは、今年2回目の参加チームですが、普段のお仕事で、神社・仏閣にある仏像や禪間などを制作されているということもあり、素材は違いますが、立体物を作るのは流石で、昨年は「12」を辰年の「龍」で表した行灯が見事でした。今年、12月6日(土)に工房へうかがうと、東京の新宿にある寺院から依頼があったという、龍の彫り物の制作中で、今年から入社された2名の職人さんも既にその龍を彫っているとのことでした。「これだけの技術はどうしたら身につけることができるのですか？」と代表の奥土居さんにお尋ねすると、「京都伝統工芸大学校で学んで、一通りの技術を身につけて入ってきてくれています。」とのこと。によみのよぶねの行灯の方は、竹組みが完成し「6」の知紙貼りが終わった所でした。「今年の制作テーマは「カラフル」です。によみのよぶね実行委員会さんから、今年は「6」の制作はどうですか？とお話がありました。岐阜らしい何かで「6」をデザインしたいと考えたところ、「エビ」(川エビ)ということも面白いのではと思いました。昨年、近所の方にお声をかけしたら、子どもさんから大人の方まで来ていただいて色塗りをしていただけましたことが嬉しかったです。タイミングが合えば、今年も近所の方にもお声がけして楽しんで参加していただけたらと思うので、白い紙を貼って後から色づけを行います！」とのことでした。(松本、高橋)



7

ごちゃまぜアート with アーラまち元気部 (可児市)



7月に込められた想い・・・制作チームは、可児市文化創造センター aia (以下、aia) を拠点に活動する「ごちゃまぜアートの会」と「aia まち元気部」のみなさんです。「ごちゃまぜアートの会」は、年齢、性別、国籍、障がいの有無に関係なく、誰もが参加可能なアートを楽しむ場づくりをしています。「aia まち元気部」は、学校の枠を超えて集まった中高生が、文化芸術プログラムを体験し、その経験を活かして aia の事業運営を手伝ったり、自ら企画・実施したりすることで、「まちを元気にする活動」を展開しています。この7月に込められた想いを、「aia まち元気部」のメンバーである中学2年生のNさんにお聴きしました。この5月から活動に参加したばかりのNさんは、インタビューは初めてだと緊張しつつも、しっかりと語ってくれました。「7月は、実は aia の誕生日なんです。7の下にあるのは太陽を表しています。aia が可児の人たちを明るく照らす太陽のような存在で、ここに集う人たちをぽかぽか温めてくれる、そんな意味を込めて太陽を加えました。『こよみのよぶね』はまだ行ったことがありませんが、すごく楽しみです。自分たちがつくった行灯が長良川の上に浮かぶ様子を想像するだけで、すごくうれしい。すごいことですよ。学校が終わるのは4時ごろですが、全力で(会場に)向かいます。楽しみー！」と、澄んだ目をキラキラさせて話してくれました。さらに、活動への参加が自身にもたらした変化についても教えてくれました。「もし『aia まち元気部』に参加していなかったら、この活動にも他の活動にも関わることはなくて、何もなかったと思うんです。誰かと一緒に何かをつくること、何かをすることは、本当に楽しいです。」「こよみのよぶね」の目的は、「人が集い、共につくること」そして「コミュニティができ、つながっていくこと」です。7月の行灯には、まさにその想いが色濃く込められています。(加納)



BELONG (中部学院大学) (関市)



関市の南端に位置する桐ヶ丘エリアは、障がいのある方のための複数の支援機関や学校が存在する重要な拠点です。このエリアの皆さんが主体となって立ち上げた制作チームの名

は BELONG。「Building Equity through Learning, Openness, and New Growth」というフレーズの頭文字からつくられ、同時に「居場所」という意味も持っています。この名には、「学び続け、オープンであること、そして新しい成長を追求することで、誰にとっても公正な社会、つまり皆の「居場所」を創造したい」という強い願いが込められていると感じます。その熱意は、11月21日に中濃特別支援学校の陶芸室で行われた知紙の色付け作業で如実に現れていました。今年のデザインは、9月の風物詩である「お月見」がテーマ。黄金色に実った稲穂と満月、そして可愛らしいさが描かれています。まんまるの月は「自然の恵みと祈りの象徴」として、古来の人々の心を現代に伝えることを意識して制作されました。中部学院大学の学生さんと特別支援学校の生徒さんは、稲穂の豊かな実りを表現する色合いを、知紙あいあいと声を掛け合いながら丁寧に作り上げていました。参加された方々からは、「みんなと一緒に作業できて楽しかった」「芸術的な色合いに染めることができた」と、共同作業への深い満足感が伝わってきました。また、竹組みを担当する中部学院大学のチームでは、参加メンバーの増加に伴い、経験豊富な上級生が下級生へ指導を行い、確かな技術継承が図られていると聞きました。チーム4名 BELONG が示すように、「こよみのよぶね」という活動を通して、桐ヶ丘エリアから広がる仲間の輪は着実に拡大しています。この熱意と連携の証こそが、冬至の夜、長良川の川面を優しく照らし、私たち一人ひとりの心を温かく照らす光となるでしょう。(取材：鳥野、加納、山本)



S★KOB0 (神戸町)



11月を担当される神戸町の S★KOB0 さんにお邪魔したのは小雨降る11月末の午後。メンバーの皆さん10人ほどに出迎えられ工房に入るし、まず目に飛び込んできたのは制作中の行灯。「11」の文字を形どった2本のキューリッポが横たわっていました。キューリッポの花言葉は「愛と思いやり」。みんなが平和で暮らせるようにとの願いを込めてこのモチーフを選んだとのこと。取材した時点ですでに骨組みは完成しており、ちょうど知紙貼りを開始するところでした。2年目ということもあり慣れた手つきで手際よくピンクの花びらが貼られ、あっという間に見事な花を咲かせてゆきます。工房の中を見渡すと壁一面に昨年の記録写真が張り出されています。きちんと整理された159枚もの写真を見ながら代表の杉原さんにお話を伺うと、町ぐるみで「こよみのよぶね」への関心が高まっていて、今年からは「こよみっけ!!」にも参加するとのこと。キューリッポの花が形をあらわした頃、雨が上がり青空が広がるようになってきたため制作中の行灯を外に出して立てることにになりました。癒し立ち上がる高さ4メートルのキューリッポに雲の切れ間から光が射し込み、拍手と歓声が沸き起こりました。(山本)



岐阜県美術館 アートコミュニケーター「～ながラー」(岐阜市)



干支行灯を制作しているのは、岐阜県美術館アートコミュニケーター「～ながラー」です。今年で6回目の参加です。昨年の辰年行灯「アシタガワ・リュウノスズ」に続く巳年行灯の制作に取り掛かったのは6月下旬のことで、メンバー24人による舟出でした。まず取り掛かったのはデザイン案の策定。月行灯を先導する干支行灯はサイズは小粒でもポップとした存在感を放つことが重要です。卵の殻から顔を出したものの、ひらがなの「み」を形どったものなど様々なアイデアが提案されましたが、直線を基調としたモダンなデザインが採用されました。本業グラフィックデザイナーのメンバーが描き起こしたデザイン画をもとに本業エンジニアが3Dの設計図を作成し、11月初頭からは全員総出で組立てを開始しています。来館者を巻き込んで盛り上がるために10月～11月には「ネーミング総選挙」を開催。これはメンバーが考えたネーミング4案に自由に投票してもらうというもの。974人もの方に参加していただき404票を獲得した「ナガラノオロキ」に決定しました。11月末～12月初頭には出来あがった骨組みへの「知紙貼り体験」と「こよみっけ!!」も開催。数多くの皆さんの協力により、スタイリッシュな「オロキくん」が誕生します。(山本)



チーム toiro (トイロ) (岐阜市)



チーム「toiro」は今年5回目の参加。「大きな倉庫があって、行灯制作に参加してくれるところがあるといいな」と制作リーダー木下さんの奥さんが耳にして、「じゃ！うちでやろう」と始まったとのこと。その倉庫は岐阜市の南西部大脳地区の田園に囲まれた開放的な環境にある。倉庫は木下さんが経営する工務店の資材倉庫。工務店さんのコンセプトが「住人十色(という)」からチーム名は「toiro」と名付けられた。倉庫に隣接してモデルハウスがあり、地域の人たちに開放され交流の拠点として機能している。モデルハウス内にはハーグティースタンド「toiro ted STAND.」もあって日射しのぬくもりのような穏やかなスペースだ。ここに集う人、発信されたSNSを見てきた人、まさに「十人十色(という)」のいろんな人たちが訪われ、語って集まって、つながって、のびやかな、とても大きなチームになっている。何年も来ている人、今年から加わった人、好きなときに来て好きな分だけ参加する。ゆるやかなコミュニティが実現していた。それは、まさに「こよみのよぶね」が目指すものでもある。この日(11月15日)は、そんな9人さんが知紙貼り作業を知気あいあいと手際よく進めていた。この季節らしい強い風に苦労しながらも、洗濯ばさみで仮止めするなど工夫を凝らし、おしゃべりしながらも手は止めず知紙がどんどこ貼られていった。「8」のデザインは、常連客の「えり」さんが描いた大きな木とリスがモチーフだ。原画をもとに木下さんが実寸へ落とし込み、全体を構成している。竹組みは専門技術が随所に生かされ(風雨に耐える)頑丈なつくりになっていた。リスの尻尾は当日設置予定で形は未公開。さらに、リスが抱えるドンダリにもサッライズが仕込まれているといい、冬至の夜の完成披露が期待される。参加のみなさんに「冬至の夜に『こよみのよぶね』を見に行きますか?」と尋ねると、「もちろん行きます」と笑顔で応じてくださった。当日、また会えると思うとこちらも笑顔になった。取材の最後には、奥さんから自家製レモネードいただき全身に和やかな時間が流れた。(堀部、加納)



岐阜小学校 (岐阜市)



11月11日の午後、すてきな秋日知。「10月」行灯の創造の場に、5年生たちの熱気が満ちていた。天井高く、壁のない、フルオープンなクリエイティブスペース。そこに集う二つのクラス、約40人の想いは、竹組みという未知の冒険に挑んでいた。手慣れた者、悪戦苦闘する者、しかし、「みんなで作る」という一途な思いが、空間にあふれ出し、彼らの手により、「10」を形どくるモチーフが、竹と知紙と光の行灯へと生まれ変わる時間だった。「1」は、遙かなるEXP01970のシンボル、太陽の塔。「0」は、今と未来を刻むEXP02025のキャラクター、ミャクミャク。このデザインを描いた一人の子に問う。「自分の作品が、長良川を行く大きな行灯になる気持ちはい?」「うれしい」と、はにかみながらの微笑み。「つくるのはどう?」の問いには、ただ一言、「とにかく楽しい」。その言葉の通り、誰もが竹を曲げ、ハッカーを操る、初めての体験に夢中だ。羨ましの、輝かしい創造の時間だった。そんな岐阜小学校 校長先生の案内で巡る学び舎は、驚きに満ちた別世界。「学校、教室は囲われたもの」という概念を打ち破る。そこは、ボーダーレスに開放的で、心地よく、やさしい空間。屋上に立てば、まるで大型船のデッキ。突き抜けた青空の下、雄大な金華山、清らかな長良川を望む、最高のロケーション。この学び舎の卒業生、日本画家の川合玉堂先生の寄贈作品2点が静かに時を刻む。見学を終え、制作現場に戻れば、奇跡が具現化していた。横たわっていた「1」が立ち上がり、腕が仮止めされ、見事な太陽の塔に。「0」は、愛らしいミャクミャクとしてその姿を現す。彼らの願いが、確かな形となっていく。本番の夜、漆黒の金華山を背に、1970年の夢と、2025年の希望を照らす雄姿が、長良川の水面上を悠々と行く。その想像は、胸が高鳴る未来の光景にちがいない。彼らが千年続く「こよみのよぶね」のこの先の100年を支えてくれるかもしれない。この行灯は、時を超え、夢をつなぐ光の舟となる。(加納)

ニュー銀座堂の愉快的仲間たち (岐阜市)



「ニュー銀座堂」は、岐阜市の柳ヶ瀬商店街にある、表現者のためのサードプレイスです。今年、岐阜県美術館で開催された「アーティスト・イン・ミュージアム AiM Vol.17 (会期：4月19日～5月31日)」で「ニュー銀座堂」の若い作家たちの公開制作と作品展示が行われましたが、エネルギー溢れる勢いのある展覧会でした。今年、初めてそのメンバーの何人かで「こよみのよぶね」の「12」の月行灯を制作されるとのこと。11月23日(日)、ニュー銀座堂を巡視してみました。この日、ギャラリー内では詩や写真、絵本など、作家が自費出版した作品集の展示・販売がされており、それぞれの作家の視点が新鮮でした。(この展覧会は11月29日までの会期)。店内では代表の渡邊百恵さんがお客様の対応をされていたので、その合間をぬって、「今年のこよみのよぶねの制作日程を教えてくださいませんか?」と尋ねたところ、「こよみのよぶねに関わっている主なメンバーは3名で、冬至の日の1週間から2週間ぐらいから頑張ってます!」とのこと。12月7日(日)、「20」の行灯と同じ場所で制作をされていました。「何をモチーフにデザインしましたか?」と尋ねたところ、「漢数字の「十二」です!」とのこと。15時ごろ、「12」の中心となるパーツがほぼ完成しているようでした。(松本、高橋)

この新聞は明後日新聞社岐阜支局員(緑カラー)が岐阜県美術館のアートコミュニケーター「～ながラー」とコラボして発行しています

明後日新聞・岐阜支局員

(緑カラー) 加納 純 松本 博之 高橋 玲子 鳥野 真介 中野 里菜 岸 大晃

～なが

(4期) 林 祐子 多田 知美 鈴木 敦子 (5期) 横田 さえ 大堀 知可子 岡田 ゆみこ 佐橋 早苗 鈴木 利弘 平光 里恵 堀部 佳輝 村瀬 美恵子 山本 むねき